



2001年 10月15日発行(隔月刊)



う 羽 化 か

2001年10月
第28号

横 浜 漢 点 字 羽 化 の 会
 〒231-0851 横浜市中区山元町2-105 Tel 045-641-1290
 発行責任者 代 表 岡 田 健 嗣
 編集責任者 宇田川 幸 子



目 次

EIBRK による漢点字変換のための入力マニュアル (1)	・・・ i
川上泰一先生に出会って (第10回・最終回) (東野 トシエ)	・・・ 1
東洋医学について (小池上 惇)	・・・ 5
漢文のページ	・・・ 7
連載「点字から識字までの距離」(25) (山内 薫)	・・・ 9
点字の読みづらさと漢点字の触読について (12) (岡田 健嗣)	・・・ 11
ご報告とご案内	・・・ 19
イラスト版「漢点字ってどんな字？」(27)	・・・ 21



川上泰一先生に 出会った(第十回・最終回)

東大阪市 東野 トシエ

昭和六〇年代・平成(承前)

晴眼者は何をしていても文字が目飛び込んできますが、私たち盲人は意識して点字を読まなければなりません。特定の図書館からは漢点字で送られてきますが、私が購読している雑誌全部が、漢点字交じり文で書かれているわけはありません。数日、数週間、漢点字に触れることなく過ぎてしまうことも多々あります。もっと多くの図書が漢点字で出版されますように切望致します。

私たちが実験ができたので、川上先生が日本点字委員会や教育委員会などに、漢点字のことを話しに行かれたように聞いています。

私は日本漢点字協会から図書を送っていただけ読書させていただいています。

最近の図書は、助詞の(わ) (え)は墨字文と同じように(は) (へ)と漢点訳して下さる

ようになりました。そして、読点もマス空けではなく導入して下さるようになりました。やはり、墨字文に近付けて下さっているのでしょうか？手軽に漢点字が書ける今日としては、そうして下さる方が嬉しいです。

川上先生は、漢点字交じり文を読んで日本語の醍醐味を盲人にも知らせてやりたいという目的で、漢点字を創案して下さったのですが、劣等生の私が「先生、今読ませていただいている本はむずかし過ぎるわ。もっと気楽に読める本を送って下さい」と申しましたら、川上先生は「よっしゃ分かった。それでいいんや。次はトットちゃん送ったる」とおっしゃり、「窓ぎわのトットちゃん」黒柳徹子著を送って下さいました。

そして、漢点訳を依頼すると快くして下さいました。『祈りと瞑想への道』榎本保郎著や『内なる生活』アンドリュー・マレー著などを漢点訳していただきました。

お借りしたい図書が漢点訳されていなくて、お詫びのお手紙をいただき、そのとき、「漢点訳本をお読み下さりありがとうございます」なんてお礼のお言葉をいただき、(まあ！私のよ

うなもの、川上先生から・・・と驚き恐縮致しました。また、あるとき本の巻数が間違つて送られて来ました。それにたいして川上先生から丁寧なお詫びのお手紙をちょうだいし恐縮致しました。

そのうち電話をしても、リツエ奥様と話す方が多くなりました。

漢点字を中国へ里返りさせたいと川上先生はおっしゃり、確か、リツエ奥様と中国へ御旅行なさったときに持つて行かれたのではないでしょうか？『新星通信』に『中国紀行』と題して連載して下さっていましたので、お読みになられた方もいらつしやることと思います。



「漢字圏の国に旅行すると通訳はいらん。通訳をしてもらうより文字を読んだ方が分かるぜ。ほんまおもしろいほどよく分かるぞ。道に書いてある標識や書き物を読むとすぐ分かります。晴眼者は漢字文化圏の国の人たちと筆談で話している。この漢点字を日本の盲人だけでなく、他の漢字文化圏の国の盲人もこの漢点字を学習したら、この漢点字を使って会話ができる

ようになる」と川上先生はおっしゃっておられました。今日ではパソコンを利用すると盲人同士だけではなく晴眼者とも会話ができるようになりしました。

平成十年ころ中国ではないのですが、同じ漢字文化圏の国、韓国へ漢点字が進出しました。これは漢点字にとつてとても素晴らしいことだと思います。

もし、川上先生がご存じになられたらどんなにかお喜びになられることでしょう。どんなにがんばっても川上先生にお伝えできないのが残念でなりません。私は川上先生と一緒に万歳三唱をしたい気持ちで一杯です。

村尾氏がホームページを開設しておられ、ここに村尾氏が開発されたフリーソフトの漢点訳印刷ツールOPを掲載しておられます。韓国の方から村尾氏の所に、「点訳ソフトを捜している」とmuraodossさんのホームページに辿り着き、OPに出会いました。早速ダウンロード、韓国のパソコンにインストールすると、こちらでもちゃんと使えています。画面に漢点字と墨字がちゃんと表示しています」というメールがあつたそうです。OPの開発者の村尾氏

も大変喜んでおられ、現在 Windows 上で使用できる、OP の開発をして下さっておられます。私もほんとうに OP を DOS / V 機で開発しておいていただいていたよかったです。日本だけのパソコンではこうはいかなかったと思います。そして、インターネットの威力の素晴らしさも知ることができました。また、OP がフリーソフトだったから、気楽にダウンロードして確認して下さったのだと思います。

この OP を利用して、漢点訳をして下さっておられる、漢点訳者は大勢いらっしゃいます。OCR で取り込んだデータを画面上で校正して下さり、漢点字プリントして下さっておられる方もいらっしゃいますし、他のワープロで入力したデータを漢点字プリントして下さっておられる方もいらっしゃいます。また、盲人はエディタとしても使用しております。ぼつぼつ君を利用して漢点字直接入力ができますし、ファイルの分割や結合などが容易にできます。

今日では、OCR が発達しました。とはいえ、ルビがあると誤字になることもありますし、手書きは今のところ諦めています。しかし、プリンターで印刷したものは、ほとんどと

いっても過言ではないほど読み取ってくれます。

私は E・Typist というソフトを使用し、USB 接続のキヤノンのイメージスキャナーを使用しています。私がぼつぼつ君で入力したものを、沖のレーザープリンターで印刷して、それを OCR に掛けて、WZ 上で OPQR でペンディスプレイに表示させて、漢点字交じり文で読んで、確認することもできるようになりました。

大阪市立盲学校の与野福三先生から、川上泰一先生の訃報のお電話をいただいたときは私の耳を疑いました。ほんとうに驚きました。お通夜に参列させていただき、リツエ奥様から川上先生の最期のときのことを教えていただきました。

川上先生のことを御存じでない看護婦さんが、「ピアノを弾いておられる？」とおっしゃり、リツエ奥様が見られると、末田統先生が作成されたキーボードを使用して、入力されている形で指を動かしておられたそうです。昏睡状態になってからも、ほんとうに最後の最後まで私たちのために精魂を注いで下さったのだなあ

と思われ、私は胸が一杯になり涙が溢れました。

「先生、今度お会いするときは徳利を持っていきます。東野はまだあんな文章しか書けないのかとお笑いになっておられることでしょうか。先生、また、懇切丁寧な御指導でよろしくお願ひ致します」。

終わりに

漢点字は、盲人の文字として読み書きできるということをし、私たち盲人がこうして実際に利用して確認しています。

漢字について精通しておられる方に漢点字を覚えていただき、漢点字は点で表す漢字としてよくできていると、文部省や教育委員会などに言っていたいだきたいと思ひます。

一般の幼児教育同様に盲教育も、三つ子の魂百までじゃありませんが、漢点字で教育を幼い時期からしていただきたいと思ひます。余暇の時間を利用して学習するのではなく、盲教育の現場に漢点字を導入して下さり、漢点字が盲人の文字として定着しますように切望致します。

この拙文は、平瀬徹氏が、NIFTY SE RVEに漢点字のパティオを開設して下さったときに、書き込ませていただいたものを土台に、今度は、羽化の会代表の岡田健嗣氏に激励していただき書かせていただきました。誠に感謝です。

『漢点字解説』や『新星通信』をお読みの方はご存じのことばかりで、ちよつと退屈なさったのでは・・すみませんでした。お読み下さいますとありがとうございます。

川上先生は漢点字を創案して下さった方ですから、偉大な先生でしたし、これと決断されれば、絶対に変更されないという頑固な一面もありました。しかし、大変温かい先生でしたと皆様方に御紹介したかったです。

重複して書き込んだり、大切なことを書きもらしていたり、私の表現不足で申し上げたいところが皆様に伝わるかどうか分かりませんが、そこは補っていただいて御判読して下さいれば幸いに存じます。

(おわり)



本会の読者の、栃木県立盲学校で、理療科の教鞭をとって
おられます小池上惇先生から、原稿を頂戴致しました。
日頃、教壇でお話しになっておられることをまとめて下さ
いました。

健康に関心のない方はございませんので、読者各位も、興
味深くお読みいただけるものと存じます。

東洋医学について

小池上 惇

現在、わが国の医学の主流は西洋医学です。西洋医学は、多くの病気の原因を明らかにし、また、多くの病気を克服してきました。ところが、西洋医学は次第に細分化・専門化するにつれ、人体を各組織・器官の集合体と見る傾向が出てきました。各々の器官の病気は治ったが、体全体としてはなんとなく調子が悪いということもしばしば起こるようになりました。

医師は、検査データや画像に頼り、合理性を重んじるあまり、患者の訴えにじっくりと耳を傾けることも、

手で診察をすることも少なくなりました。西洋医学のマイナス面が表面化するにつれ、古来からの東洋医学が少しずつ見直されるようになってきました。

そこで、今回は、東洋医学について私見を述べてみたいと思います。

一 東洋医学と西洋医学の相違点

①東洋医学は全体的、西洋医学は分析的。

東洋医学では、人体を全体として観察し、西洋医学では、局所的に観察します。

例えば、腰が痛いと訴えてきた患者についてみると、東洋医学では、望診・聞診・問診・切診などによって、体全体のバランス、臓腑・経絡の状態などを観察するのに対し、西洋医学では、腰部を中心に画像診断や徒手検査によってその原因を調べようとします。

②東洋医学は相対的、西洋医学は絶対的。

東洋医学では、陰陽、虚実、寒熱、表裏など、対立した概念を診断の根拠としますが、西洋医学では、科学的かつ合理的な検査データの数値などを根拠とします。

例えば、発熱の場合、東洋医学では、患者や診者の感覚を基にして発熱の診断をするのに対し、西洋医学

では、体温計による数値を基本にします。そして、脈拍・血圧・血液の変化など、数値を診断の根拠にしています。

③ 東洋医学は随証治療、西洋医学は病名治療。

東洋医学では、診断の結果得られた症状群を証とい、体の全体の状態を表すものとしています。

東洋医学の診断は、この証を決めるためのもので、治療もこの証に従って行われます。言い換えれば、東洋医学では、診断によって、幾つかある治療法の中から、その人に最も適した治療法を選ぶのです。これに対して、西洋医学の診断は、病気の原因を明らかにするためのものです。

従って、東洋医学では、同じ肺結核でも証によって治療法が異なりますが、西洋医学では、常に結核菌に対する治療が行われ、場合によっては手術による患部の切除が行われます。また、がんに侵された患者に対して、西洋医学では、患部を徹底して除去してしまうという方法が主流になっていますが、東洋医学では、患者の抵抗能力を高め患部の縮少、消滅を図っていくようにするのが主な考え方です。

④ 東洋医学は身心一如、西洋医学は心身二言論。

東洋医学では、精神と身体は一体であると考えられています。西洋医学では、各器官の独自性を問題に

する傾向が強く、身体と精神は別個に考えられているようです。最近、心療内科という領域が西洋医学にも設けられ、精神と身体との関係が少しずつ見直されつつありますが、医療現場においてはまだ、十分浸透していません。

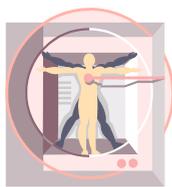
⑤ 東洋医学は未病治の医学。

東洋医学では、健康を第一に考え、病気を治すことより、病気にならないよう予防することに重点をおいています。最近、西洋医学でもこの考え方に基づき第一次予防（疾病の予防と健康の増進）が重視されてきています。

⑥ 東洋医学は自然哲学思想、西洋医学は自然科学思想。

東洋医学では、陰陽論、五行論などの哲学思想を人体に当てはめ、西洋医学では、観察や実験によって得られた知識を基にして人体を研究し、先ず、人体の構造や機能を明らかにすることにより、それを基にして医学を構築していったものです。

以上、東洋医学と西洋医学の相違点について述べてみましたが、次回は、東洋医学の基礎である、陰陽・五行について書いてみたいと思います。



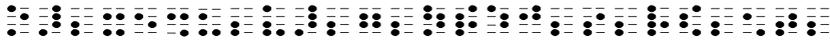
静夜思

李白

牀前 看ル月 光ヲ



疑フラクハ是レ地上ノ霜カト



举ゲテ 頭ヲ 望ミ山 月ヲ



低レテ 頭ヲ 思フ故 郷ヲ



秋風引

劉 禹錫

何ノ処ヨリカ秋風至リ



蕭蕭トシテ 送ル雁 群ヲ



朝来 入り庭 樹ニ



孤客最モ先ニ聞ク



点字から識字までの距離 (二五)

山内 薫 (墨田区立緑図書館)



前回ご紹介した『子どもはことばをからだで覚える』(正高信男著 中央公論社)には、もう一つ非常に興味ある事実が載っているのです、ご紹介したい。それは「手による喃語」についてである。

この本の第三章には、先天性の聴覚障害を持つ子どもの音声発声のことが触れられている。

実は、生まれてから全く音声情報を入力されずに育った赤ちゃんでも、生後六ヶ月頃以降クーイングは発声され、生後六ヶ月頃になると過渡的な喃語も出て、身体運動と同期する。しかし、基準喃語が産出するようにはまざるらないという。このことは音を聞く能力が無くても、喃語の段階以前の発声は可能だが、調音を必要とする基準喃語を発声するには、聴覚経験が不可欠であることを物語っている。ところが先天性の聴覚障害児の満一歳に達するまでの詳細な観察から、別の言語発達の過程が浮かび上

がってきたというのである。つまり、音声上の基準喃語を習得できないからと言って言語そのものを習得する可能性が断られたわけではないという事実が判明した。赤ちゃんを注意してみてみると、ダーダーダー……、と言い出す代わりに、微妙で複雑な手の運動が現れ出すというのである。そして、その運動、動きは世界各地に存在する多数の手話に共通する基本パターンに対応するということをカナダの学者ローラ・ペティトが発見した。

手や腕を何度も反復して動かす↓やがて手の形や手を持つていく↓身体の位置にいくつかの型ができていく↓そして最後に指が様々なパターンを作り出す。この一連の手の運動を、ペティトは「手による喃語」と命名したのである。もしも、その子どもの親が手話の使用者である場合、「手による喃語」は生後九ヶ月以降、生起頻度が圧倒的に増加していき、やがて成人の行うサインが生ずるようになる。しかし、手話使用者が周囲にいないくとも、「手による喃語」は、音声による基準喃語を出せない限り、多少とも必ず出現する。つまり音声による言語表出ができないことが判明すると、手段を他に求め

るメカニズムを人は遺伝的に付与されていることを示唆しているという。

もちろん、周囲に手話使用者、つまり手によるサインを受け止めてくれる人がいなくては「手による喃語」は発展しようがなく、やがて消滅してしまう。しかし、手話は単に音声言語を手によるサインによって置き換えたものではなく、根底にある身体感覚が変換されて行き着いた言語であることが証明されようとしているのではないだろうか。この本のあとがきに、先のペティトが観察した事実が記されている。それによれば「手による喃語」は聴覚障害の赤ちゃんだけではなく、頻度は少ないものの健聴な乳児にも認められるという。つまり、人は誰でも手話を言語として獲得する可能性を持って生まれるが、音声言語中心の生活スタイルを送っているために声に限定した表出へとシフトしてしまい、成長するにつれて、一層言語の身体性を希薄化させてしまうと考えられる。

実は、この本には記されていないが、コーダの存在がこのことを証明している。コーダ(Coda)というものは、ろうの両親から生まれた健聴の子どものことを言う。自身は健聴であるけれども

両親がろうであるために、子ども時代に手話を習得した人たちで、英語の「Children of Deaf adults」の略語から、こう呼ばれている。家庭では日本手話とろう文化、地域では日本語と聴者の文化を習得し、「バイリンガル・バイカルチュラル」な存在として成長する。つまり、二つの言語と二つの文化を持つ、ろう者と聴者をつなぐ架け橋として期待されている人のことである。(『Deaf No. 1』)



一九九六 発行人・米内山昭宏よないやまあきひろ）従って、赤ちゃんは誰でも、もし手によるサインを受け止めてくれる人がいれば、手話という言語を習得する可能性を持っていると言うことができる。

私たちは言語と言えば、当たり前のことのように音声言語のことを思い浮かべてしまうが、「手話と音声言語の違いは、身体感覚が変換されて行き着く先が若干ずれただけにすぎないのであり、そこへ到達するまでの過程で起きる内容は、本質的に何ら変わらないように思われるのだ。」と著者は述べている。テキストとしてのことばを受け取り、キーボードを使ってことばを産出する傾向がますます強まる中で、言語の身体性はますます

希薄になって行く事が予測される。

あとがきで著者は、「『ことばを持った動物』たるヒトは、『テキストとしての言語を所有する動物』にはとうていなりきれないのだと私は思う。ゆえに、身体性を表面的には消し去ることに成功したとしても、決して抑圧することとはできないのだろう。ただ、形を変えて、姿を現すだけなのではないか。そして、それこそ音楽というものの本質ではないかと、私には思えるのだ。それゆえ、およそ音楽は、歩行のリズム・和声・韻律・手の動き（舞踊）といった、ことばの習得に重要な役割を果たすにもかかわらず、言語がテキスト化するなかで排除された要素によって構成されているのではないだろうか？」と述べている。これが、この本の「はじめに」に提起された「われわれが『ことばを習得したゆえに失った』ものがあることによつて、人類が古今東西を問わず、音楽に魅せられるのだ」という推論への仮説だが、この「言語・身体・音楽」という問題は、緑図書館で毎月行っている「乳幼児のためのお話会」でも日常的に感じている問題でもあり、興味が尽きない。

点字の読みづらさと

漢点字の触読について（十二）

横浜漢点字羽化の会 代表 岡田 健嗣

六 日本語点字の成立とそれが残したものの

本稿は、日本語の表記が漢字仮名交じり文であるにも関わらず、現在使用されている日本語の点字に、何故漢字が存在しないのか？また、何故そのことが正面から問われて来なかったのか？という、率直な疑問を考える必要を感じて起こしたものです。また本稿は、本会の活動の主眼である漢点字の、その果たし得る可能性に迫りたいという試みでもあります。そのために、①視覚障害者の読書の手段・方法の分析、②視覚障害者の点字離れの現象、③ルイ・ブライユの点字表と点字の触読のメカニズム、④石川倉次先生（いしかわくわじ）の「日本語点字」の構造、⑤日本語点字の成立と明治初頭の文字と文章、と考えて参りました。

現在も大多数の視覚障害者は、日本語の点字という時、仮名の点字のみを指す語として用いています。「日本の視覚障害者は、既に漢字の知識を充分

持つている」、あるいは「日本語においては、既に漢字の役割は終わった」というような、何らかの明らかな理由が提示されて、改めてここで漢字の知識を求めるには及ばないことが証明されているなら、確かに殊更漢字の普及を図る必然が失われます。

しかし今、このような視覚障害者に漢字の知識は必要とされないという、積極的な理由が提示されないままに、その普及が拒まれているのが現状です。このような情況に私は、一石を投じてみたいという誘惑に抗し得ません。

そこでここでは、日本語点字の成立期と現在とを比較して、どのように連絡されているかを検討してみたいと思います。

ルイ・ブライユの〈点字〉と、 石川倉次の〈日本語点字〉

既に詳しく触れたように、一八二九年、フランスにおいて、ルイ・ブライユが、現在、私たちが使用している〈点字〉の原形を発表しました。表一がその一覧です。ブライユは、縦三点・横二列の六つの点を一つの単位とした、極めてシンプルな点の組み合わせを考案しました。そして、この点の符号で欧米の言語表記に用いられるアルファベットを表すこ

とに成功したのでした。

後に欧米各国では、それぞれの国語に合った点字の符号を開発して、今日に至っています。その中でも取り分け興味を惹かれるのが、点字の略字符号です。点字は触読されなければなりません、たとえシンプルな構造の点字といえども、指先で触れて読解するのは、一般の文字を目で見ただけ触読し易い点字は参らなかつたのです。できるだけ触読し易い点字の体系が求められて、懸命に研究されたのでした。二十世紀初頭には、各国語それぞれに、アルファベット二六文字に加えて、音節符号ともいうべき略字符号の体系が完成されたのでした。

欧米の言語は、音節と、それが指し示す意味・事柄とが密接な関係にあつて、文字の表記法も、その音を指示することで、その語の意味・内容を表す構造になつていきます。従つて点字の符号も、その文字であるアルファベットに加えて、音節を単位とした符号（略字）を作ることで、触読による読み取りの労を軽減しながら、しかも充分その内容の表現と読解に耐え得る点字符号の作製に成功したのでした。

（拙文「点字の読みづらさと漢字点字の触読について
七、八」 本誌二〇、二二一―号）

表 一

ルイ・ブライユの点字符号表

1.									
1a	2b	3c	4d	5e	6f	7g	8h	9i	10j
2.									
11k	12l	13m	14n	15o	16p	17q	18r	19s	20t
3.									
21u	22v	23x	24y	25z	26	27	28	29	30
4.									
31	32	33	34	35	36	37	38	39	40w
5.									
41	42	43	44	45	46	47	48	49	50
6.									
51	52	53	54	55	56				
7.									
57	58	59	60	61	62	63			

ENGLISH BRAILLE, AMERICAN EDITION 1977:

American Printing House for the Blind

明治二三（一八九〇）年、我が国でも点字が公認され、〈日本語点字〉として今日に至っています。表六がその一覧です。

この〈日本語点字〉の開発者は、視覚障害者は知らぬ者のいない、石川倉次先生です。

ブライユの点字は、六つの点の組み合わせ六三通りを、まず上の四つの点の組み合わせから一〇個の符号を作り、それを基本形としました。その基本形に残りの下の二つの点を付ける方法を採用して、四〇個まで完成しました。後の一〇個を、基本形の四つの点の組み合わせを、そのまま下の四つの点の位置に下ろした形にして、残りの一三個を、それまでの規則に当てはまらないものとして、後ろに配しました。すなわち、五〇個までの点字符号は、大変規則的で、整然と並んだものになっております。そして、その符号を文字として用いる時、ブライユは、先頭の符号をAとして、そのまま順に当てはめて行きました。二五番目の符号がZとなりました。Wだけは、当時は未だ各国語のアルファベットが、現在のように確定されていなかったことを反映して、四〇番の符号が使われています。

このようなブライユの点字表を、石川先生は、日本語の五十音表に当てはめることにされました。

表 六

石川倉次の日本語点字の構造

あ	い	う	え	お		か	き	く	け	こ	
⠁	⠃	⠅	⠇	⠉		⠊	⠋	⠍	⠎	⠏	(K ⠑)
さ	し	す	せ	そ		た	ち	つ	て	と	
⠓	⠕	⠗	⠙	⠓	(S ⠑)	⠔	⠒	⠖	⠘	⠎	(T ⠑)
な	に	ぬ	ね	の		は	ひ	ふ	へ	ほ	
⠎	⠇	⠉	⠏	⠑	(N ⠑)	⠒	⠓	⠖	⠘	⠎	(H ⠑)
ま	み	む	め	も		ら	り	る	れ	ろ	
⠓	⠕	⠗	⠙	⠓	(M ⠑)	⠔	⠒	⠖	⠘	⠎	(R ⠑)

石川先生は、日本語が五つの母音を先頭に、五つの段と十の行に整然と並んでいることから、ブライユの点字表との類似をお感じになられたに違いありません。

そこでブライユに倣って、また、当時普及を見せ始めたローマ字の表記をヒントに、〈日本語点字〉を完成されました。(拙文「点字の読みづらさと漢点字の触読について 八、九」 本誌二一、二三号)

しかし石川先生は、日本語の点字は仮名だけでよしとされて、漢字に相当する触読文字の研究には手を染められませんでした。

点字は明治のタイム・カプセル

前号まで、明治初期から現代に至る、仮名文字運動を見て参りました。

仮名文字運動には二つの潮流があつて、明治初期のそれは、我が国で識字を推進するためには、複雑な漢字の教育は困難であつて、漢字のない文字表現が志向される必要があるという考え方が力を持つて、日本語の表記から漢字を排そうとする動きがありました。

その根拠とされた思想が、「言文一致」でした。すなわち、話し言葉をそのまま文字に写せば、耳で聞くのと同様に、音だけの文字、仮名文字で充分というのでした。

その思想の根底には、西欧の文章は、口で話された言葉そのものを文字に置いたもので、それまでの日本語の表記とは異なっている。

日本語も西欧の言葉と同様の機能を果たさなければ国際競争に負けてしまう、という西欧の文化・文明への強い畏怖と自らの劣等意識が含まれていたのです。またそこには、西欧の文化・文明があれほど発達したのは、たった二六文字のアルファベットで全ての言語表現がそれで可能なことから、日本語の表記もそのような文字の体系にしなければ、西欧には追いつけないという焦慮があったのです。

しかし、明治も二〇年代に入りますと、仮名文字だけの表記への標榜は影を潜めて行きました。

言文一致の運動も文学運動となつて、日本語の文字表現から、漢字を除くことは不可能であることが知られるようになったことと、都市の大衆の増加と新聞等のメディアの発達が、読者層を広げて、識字を急速に伸ばしたことによるものです。

もう一つの流れは、日本語が、通商上大変不合理的な文字の体系であることの発見です。

外国との商業上の交渉では、契約が最も大きな力を持ちます。その契約に至るまでに、文書を頻繁に往復させます。その交渉の間、正に時は金なりが実感されるのです。このような中で、より効率的に文書が作製できないかと望まれたのが、仮名文字だったのです。

しかし、点字の成立期と重なるのは前者で、「我が国の国民に漢字を普及させるのは、大変困難である」という考え方の元に推進されたのがこの運動でした。

この「我が国の国民」のところを、「我が国の視覚障害者」に置き換えてみれば、私たち日本の視覚障害者の置かれている場所が、よく理解できるのではないのでしょうか。

今年で日本語点字が公認されて、百十一年を数えます。しかし公的には、視覚障害者（児）への漢字の教育の検討がなされたことは、未だかつて一度もなく、川上先生の創案されたこの漢点字を、独力で習得することで、辛うじて漢字の世界への通路を確保できるようになって来たのです。その意味で、石川倉次先生いしかわくらじの〈日本語点字〉

は、負のタイム・カプセルと言ってよいものと思われまふ。

明治の近代化は、一般には国民の識字にも力を発揮しましたが、一人視覚障害者だけには、未だその文字すら公にされていない状況なのです。

せめて、盲学校や点字図書館では、個人の権利として、漢字の教育や、漢字、漢点字の教材の検討に着手しては如何かと思わずにはおられません。

パソコンと点字と視覚障害者



本稿の末尾に、一つのエピソードを記すことをお許し下さい。

この程のパーソナル・コンピュータの普及は、驚きを禁じ得ません。既に一家に一台を越えて、テレビや冷蔵庫と同様の家電製品と言ってよい程になって参りました。と書きながら、私自身、パソコンなしには書いたり読んだり通信したりということができません。大きく言えば、生きて行くのに欠かせないものになっているのです。

多くの視覚障害者が私と同様、パソコンを使うことで、生活の幅を広げておりますし、これから

使いこなそうと頑張っている人も沢山おられます。

視覚障害者がパソコンを使用する時、画面の上の操作に、大きな困難を伴います。それは、パソコンというメカニズムに関わる困難ばかりでなく、極めて人間的な、あるいは社会的な問題をも含んでおります。

視覚障害者がパソコンを使用する時、まず何をしたいかと申しますと、やはり文字を書きたい、メールのやり取りをしたいということになります。



そこで、視覚障害者も一般のワープロ・ソフトと、視覚障害者専用のスクリーン・リーダーを購入します。スクリーン・リーダーとは、コンピュータの画面に現れる文字を音声に変えて、その音声スピーカーから出すソフトです。その音声を頼りに、キーボードをたたいて操作するのです。

一応の操作を覚えた後、いよいよ漢字仮名交じり文に挑戦することになる訳ですが、これも全て音声の説明を頼りにしなければなりません。

この場合、漢字も例外ではなく、音声化して説明することで、どの漢字か判別できるようになっ

ています。と申しましても漢字の説明とは、その漢字の音や訓や、あるいはその漢字の大凡の意味を声にして読み上げさせるようなもので、これがすなわち、「漢字の説明」になっているといえるものかは、やはり疑問に思わざるを得ません。

例えば「学」という文字であれば、「まなぶのがく」、「校」であれば「がっこうのこう」というように、こんな字ですよと、読み上げてくれるのです。F e p による漢字変換でも、出て来る候補文字を、このようにして知らせます。

ある古いソフトで、以上のような漢字の音声化に際して、「州」の字の説明において、小さな、しかもエキセントリックともいえる誤りが犯されました。その説明は、「あめりかがっしゅうこくのしゅう」とされていたのです。

確かに小さな間違いで、小さな修正で直すことのできるものではありませんが、その理由を考えますと、忸怩たる思いに囚われます。この間違いの起こりは、決して単純ではありません。

そのプロセスを、面倒でも追ってみる必要があるのではないのでしょうか。

まず音声化ソフトを聞き分けることのできる人は、日常的にそのソフトを使っている人です。ここで考えられる人は、やはり視覚障害者です。

晴眼者の人で、音声を頼りにパソコンを操作できる人は、大変数が限られているものと想像されま
す。

次に、視覚障害者の殆どが、漢字の知識を持ち合
わせていないことです。

そのような人が「州」という字に
出会った時、英語のstateを思い浮か
べたものと考えられます。stateはア
メリカの「州」です。



アメリカはこのstateが集まって一
つの大きな国家をなしているのですから、「あめり
かがっしゅうこく」とは、「アメリカ合州国」と表
記されるものと考え、その他の可能性に気付くこと
ができなかったのでしょうか。「衆」の字が用いられ
るなどは、夢にも思わなかったに違いありませ
ん。

明らかに、言語に対する器の小ささを露呈した例
で、視覚障害者の一般が、このように言葉を使用し
ていると見ても、あながち間違っていないのかわし
れません。

現在、多く使われているスクリーン・リーダーに
も、漢字の音声化には、少なからず類似の問題があ
ります。

これは、放っておく訳に行かない問題ではありま
すが、しかし、視覚障害者自身の、漢字の知識を獲

得しようという努力がない限り、今後も繰り返す
ことになるのでしょう。

(次回は、日本点字委員会の見解から、漢字
教育の行われていない理由について考えて
みます。)



ご報告とご案内

1 EIBRK、及びEIBRKWの、入力マニュアルについて

本誌ではこれまで、本会が開発・使用してきます漢点字変換プログラム、EIBRK (MS-DOS用)、及びEIBRKW (WINDOWS用)の操作マニュアルを連載して参りましたが、前号で一応の収束を迎えました。操作に関してはほぼ網羅できたものと考えておりますが、詳細に渡つての不十分さは否めません。ユーザーの皆さまには、ご不明な個所がございましたら、ご遠慮なく、ご照会下さい。

そこで本号から、入力と編集の解説を収めることにしました。

本会では、漢点字の書物を、コンピュータ点訳で製作するに当たつて、左のような工程を踏んでおります。

- ① 漢点字訳の対象の活字書を、コンピュータに入力して、テキストファイルを作製する。
- ② 会員が三名一組で、互いの入力分を校正する。
- ③ 校正の済んだテキストファイルを、EIBRK、あるいはEIBRKWで、漢点字文に変換する。
- ④ EIBRK、あるいはEIBRKW上の画面で、漢点字文としてのレイアウトに整形する。
- ⑤ 点字プリンターで打ち出して、しかるべく製本する。

以上の作業のプロセスによつて、漢点字書が完成します。そしてその書物は、希望された読者の皆さまにお届けされます。

この製作の工程は、どれも疎かにできないものです。今般取り組んでおります「青空文庫」のように、既に出上がったファイルが存在する場合でも、前号でご紹介しましたように、漢点字の書物としてふさわしいレイアウトに整形する必要があります。記号の類やルビの付け方、また全体としてのバランス、表題や章立ての配置など、その書物に固有の特徴を適切に表現するのがこの「編集」です。

特に入り口の入力と校正は、その書物の帰趨きすうに関わります。

本会では、入力に入る前に、全体の大枠を決めて、個別の入力マニュアルを作つて、それに添つて入力し、校正を行つております。

本号より掲載致しますマニュアルは、その意味で、最も基本的なものと言えるものです。

漢点字は、日本語の一般の墨字の文書と、触読用の文字の文書との隔たりを、ごく小さくしてくれました。しかしそれ故に、一般の文字と、触読文字との違いを際立たせてもおります。

このマニュアルをご検討いただいで、漢点字の文書のよりよい姿をご提案いただけることを希望して止みませぬ。

一 漢文の初級のテキストが完成しました。

ごく易しい漢文の入門書を、というお声にお答えして、会員の田中かほるさんに作製していただきました。

今年の初めに、本誌に、漢点字文においての、漢文の表記について、本会の見解を発表しました。その後、視覚障害者の読者の皆さまから、漢文の読み方を習得したいというご希望を、沢山頂戴しました。

そこで検討した結果、できるだけ分かり易いものである必要を感じて、既存の解説書の漢点字訳でなく、書き下ろしにしていただくことにしました。

ご希望の皆さまには、本誌と相前後してお手元にお届けしているものと存じます。

漢点字のテキストと、私が吹き込んだテープの解説付きで、二巻となっており、今回は一巻だけをお送りしております。

また本誌にも、近く分載する予定です。

三 青空文庫からの漢点字変換について

前号で紹介致しましたように、青空文庫所蔵のテキストファイルソース・データとして、漢点字への変換が進んでおります。

大変豊かな漢点字のライブラリーが出現するものと存じます。ご期待下さい。



四 ホームページの立ち上げについて

本会も、ホームページの製作を計画しております。

本会の活動のご紹介、ニーズの受け付け、ライブラリーの運営など、盛り込みたいものが山積しております。

ご意見の交換の場としてのご活用も考えておりますので、どしどしアクセスいただくようお願い申し上げます。

五 社会へ感謝を込めて

市社協のご紹介で、代表の岡田が、ブルデンシヤル生命保険会社様の、グローバル・ボランティアデーのボランティア体験講習会にお招きいただきました。

主に視覚障害者の歩行の誘導の方法についてお話しさせていただきました。また実践として、お二人に組んでいただいて、誘導歩行を体験していただきました。階段の昇降やエスカレーターの乗降など、その危険さと、予想と違つての容易さなどを知つて、新鮮な視野にお気付きいただけましたものと存じます。

また、本会の活動も、僅かではございますが、お話しさせていただきました。少しでも漢点字訳の活動にご関心をお寄せいただくことができれば幸いです。

今後このような機会をお与えいただけるようでしたら、積極的に参加させていただきたいと考えております。

漢点字ってどんな字？ 27

第二基本文字 その3

1. 第一基本文字と関連した漢点字

第一基本文字 第二基本文字

⠠	〈⠠宿〉	⠠	⠠	写	(宀、かんむり)												
⠠	〈⠠学〉	⠠	⠠	愛	⠠	⠠	⠠	光	⠠	⠠	文	(かんむり)					
サ	⠠	〈⠠都〉	⠠	⠠	陸	(邑阜)											
ス	⠠	〈⠠癸〉	⠠	⠠	冬	⠠	⠠	⠠	⠠	⠠	罪	⠠	⠠	⠠	⠠	虎	(夂夂网虍、かしら)
ソ	⠠	〈⠠馬〉	⠠	⠠	牛	⠠	⠠	⠠	⠠	⠠	羊	⠠	⠠	⠠	⠠	豚	(牛羊豕豕、動物)
チ	⠠	〈⠠竹〉	⠠	⠠	雨	(竹雨、かんむり)											
ツ	⠠	〈⠠土〉	⠠	⠠	土	(土土)											
ト	⠠	〈⠠戸〉	⠠	⠠	居	⠠	⠠	⠠	⠠	老	(戸屍老、かんむり)						
ネ	⠠	〈⠠示〉	⠠	⠠	衣	(示衣)											
ノ	⠠	〈⠠私〉	⠠	⠠	米	(禾米)											
ハ	⠠	〈⠠走〉	⠠	⠠	延	⠠	⠠	⠠	⠠	⠠	支	⠠	⠠	⠠	⠠	遊	(走支進、にょう)
ヘ	⠠	〈⠠玉〉	⠠	⠠	王	⠠	⠠	⠠	⠠	⠠	主	(玉王主)					
ミ	⠠	〈⠠耳〉	⠠	⠠	身	⠠	⠠	⠠	⠠	⠠	足	(耳身足)					
メ	⠠	〈⠠目〉	⠠	⠠	自	(目自)											
モ	⠠	〈⠠門〉	⠠	⠠	气	⠠	⠠	⠠	⠠	⠠	包	⠠	⠠	⠠	⠠	区	(門气勺匚、かまえ)
ヨ	⠠	〈⠠店〉	⠠	⠠	原	(广厂、たれ)											
リ	⠠	〈⠠分〉	⠠	⠠	今	(八人、かしら)											
⠠	⠠	〈⠠日〉	⠠	⠠	白	(日白)											
⠠	⠠	〈⠠困〉	⠠	⠠	我	⠠	⠠	⠠	⠠	⠠	式	⠠	⠠	⠠	⠠	用	(口戈、かまえ)

2. 第一基本文字との関連の薄い漢点字

第一基本 第二基本文字			第一基本 第二基本文字			
才	頁	君	ホ	方	夕	死
カ	金	川	マ	石	立	
コ	子	工	ム	車	虫	羽
シ	市	色	ヤ	病	山	矢
セ	食	鳥	ユ	行	弓	
タ	田	谷		心	桜	菊
フ	女	舟	ン	止	欠	
ヘ	玉	将				



前 回 の 復 習

⊖	ハ	ノ	木	ト	ツ	子				
玉	走	私	示	戸	土	竹				
(宝)	(超)	(秋)	(宗)	(肩)	(社)	(篤)				
主	王	支	遊	延	米	衣	老	居	士	雨
(柱)	(理)	(枝)	(運)	(廻)	(番)	(枯)	(者)	(届)	(志)	(雷)

志朗君 今日は第一基本文字と関係の
 深い文字の最後だね。
 来ちゃんでもその前に、前回の復習よ。

未 志 冠 だ ね。
子 冠 と 雨 冠。



未 志 ツ 形 が 似 て い る ん だ。
横 線 の 長 さ が 違 う。

未 志 ト 垂 れ の 付 い た 冠。
戸、居、老。



未 志 ネ 偏 に な る と カ タ カ ナ の ネ に 似 て く る ね。

未 志 ノ 私 と 米。

未 志 禾 (のぎへん) と 采 (のぎめ) だ。

未 志 ハ 走 繞 互 繞 支 繞 之 繞
(に よ う) だ ね。

未 志 へ は 玉、王、主。



未 志 基 本 文 字 っ て い う の は、一 つ の 漢 字 と し て も、部 首 と し て も 用 い ら

未 志 れ る 漢 字 を い う ん だ。

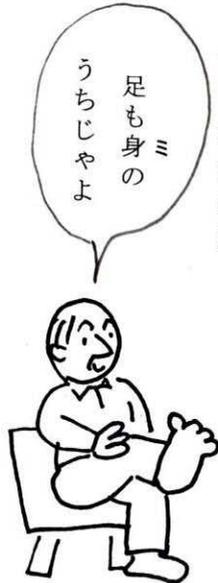
未 志 こ れ ま で 勉 強 し て き た の は、全 部 基 本 文 字 な の ね。

耳
身
足

未 志 耳 と 身 は 形 が 似 て い る け れ ど、足 は 違 う わ ね。

未 志 だ も 身 体 の 部 分 だ よ。

未 志 あ あ そ う か、身 体 と 部 分 で ま と め た の ね。



聖 セイ・シヨウウ
ひじり
恥 チ
はじ・はじる

射 シャ
いる
寸
は比較文字

促 ソク
うながす
捉 ソク
とらえる




志 形がよく似ているね。

未 自  は、目  の上に点が

付いているのね。

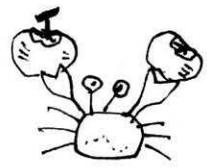
志 自分のことを
指す字だね。

ほかに

：から、：より
という意味にも
用いられるよ。

相 ソウ・ショウ
あい

息 ソク
いき・むすこ



     
 有 朋 自 遠 方 来
 朋有り遠方より来たる







未 門  は門。モ  に1の点、2の
点、3の点。これは何？

志 構えだよ。この四つは、
みんな構えなんだ。

門は門 (もんがまえ)
 気は気 (きがまえ)
 包は包 (つつみがまえ)
 区は区 (はこがまえ)



 モン
 とい・とう
 カン・ケン
 あいだ・ま

 キ
 (ゆげ)
 旬
 ー (国字)
 におう・におい

 ショウ
 たくみ
 ↑
 斤

 は比較文字

ヨ
店

原



志 店と原だ。
 未 これはわかるわ！ 垂れでしよう。
 志 点があるかないかの違いだね。
 未 だけど意味はちよつと違うよ。

未 そうね、店
 家の屋根と壁の形。
 未 は広(まだれ)

原
 は厂(がんだれ)



庫
 コ・ク
 くら

圧
 アツ
 (おさえる)

厚
 コウ
 あつい

リ
分

今



未 これは屋根の形ね。
 志 上が三角になっている字だ。
 未 八頭、人頭(人屋根)。

全
 ゼン
 まったく
 合
 ゴウ・ガツ
 あう

リ下がり
日

白



未 日と白
 のように、上に点が付くのね。
 は、目と自

早
 ソウ・サツ
 はやい
 畠
 はた・はたけ
 (国字)

泊
 ハク
 とまる
 拍
 ハク・ヒョウ
 うつ

今日の近似文字

近 似 文 字	第 二 基 本 文 字
面	自
句	包
凶	区
旧	白
或	我
角	用

作・岡田
絵・吉田

内	戦	国
うち	セン	くに
ナイ・ダイ	たたかう	
周	代	困
まわり	ダイ	こまる
	かわる・よ・しろ	コン

困は口（くにがまえ）
 我は戈（ほこがまえ）
 式は弋（しきがまえ）
 用は冂（けいがまえ）



志 これもみんな構えになるね。

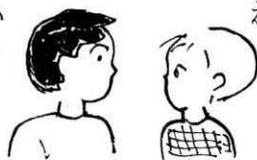
レ下がり

我
式
用

お 未 お 志 未
 例をたくさん出すのも
 いいわね。
 でも、基本文字が終わらないと
 分からなくなっちゃいそう！
 そのとおりよ。もうしばらくは、
 ゆっくりやりましょうね。

おねえ 第一基本文字と関連の深い第二基
 さん 本文字はこれで終わりよ。どう？
 大事な部首ばかりでしょう。

そう、冠とか構えとか、本当に
 基本的な部首が多かったわね。
 もう少し細かく、沢山
 の文字を知りたいな！



火より火を奪ひ烈しく秋刀魚もゆ



天野 莫秋子



石垣の上の兄より石榴受く



広瀬 直人



蔵の戸のしづしづ重し星月夜



野沢 節子



(「歳時記」より)



編集後記

今、編集作業が終わりました。虫の声が聞こえてきます。「羽化」の編集をお引き受けしたのも十二年十月号からでした。あの時も、虫の合唱が賑やかでした。

今では、生活サイクルの中に家事・仕事・編集・習い事が自然に組みこまれていきます。

「あら！点字は？」大変、完全に頭の中に残っています。本号より【EIBS】による漢点字変換のための入力マニユアルの連載が始まります。(二から覚えます) 毎回編集の度に、勉強不足が露呈します。

普段、本や新聞を何気なく読んでいますが、ルビが振られているので、漢字を読めた気になつて、事に改めて気付きました。特にワープロ入力を始めパソコンと移り、判らない漢字を辞書で調べる事が非常に少なくなりました。つい画数で検索して、解決しておりました。今回、「忸怩」の読みが判らず、岡田さんにお聞きしました、辞書も調べず・・・後日、朝日新聞の記事の中にルビが振られて、使われていました。今回の事がなければ、そのまま、読み終えていたと思います。読めたつもりで・・・

《お詫びと訂正》

前号で「点字から識字までの距離」(93)となつておりましたが(94)の誤りでした。お詫びいたします。

今回の発行は十二月十五日です。 宇田川 幸子

※本誌(活字版・テープ版・ディスク版)の無断転載はかたくお断りします。 表紙絵 岡 稲子

連載 E I B R Kによる漢点字変換のための 入力マニュアル（1）

以前にも述べましたように、このE I B R K (W)はテキストファイル（墨字文）の漢字部分を漢点字に、カナの部分はカナ点字に変換したファイル（以後単に漢点字文とする）を作成し、それによって点字プリンターで点字を打ち出したり、ピンディスプレイに表示して点字を読んだりすることができるようにするものです。

しかし、この漢点字文への変換は、どんなテキスト文でもできるというわけではありません。墨字文では無数の記号類が使われており、それらの使用法は必ずしも統一されていませんし、文章のレイアウトもまちまちです。当会では、漢点字文として合理的で理解しやすいものが得られるように、その元となるテキスト文を作成する場合の約束事を決めました。それがこれからご紹介する入力マニュアルです。

1. 基本的な約束事

- ① 原則として、スペースも含めて全て全角文字で入力します。
矢印キーで移動すると半角のスペースになりますので、スペースは必ずスペースキーで全角入力して下さい。
- ② 原則として、文章は原文通りに入力します。
- ③ 原則として、数字も、算用数字は算用数字で、漢数字は漢数字で、ローマ数字はローマ数字で原文通りに入力します。
- ④ 通常の文章では、各段落は二つスペースを入れた後、3マス目から書き始めます。段落の終わりは必ず改行キー（エンターキー）で改行して下さい。（改行マークの確認できるものが便利です。）
- ⑤ 見出しや題名などのレイアウトは、全体のバランスを見て決めます。行頭にいくつかのスペースを入れる場合、原則として偶数個とします。
- ⑥ 入力ファイルは、テキストファイル形式で保存して下さい。
[以下の（ ）内の数字は、JISの16進コードです。]

2. 間違いやすい記号類

① 山形カッコ 〈 〉

キーボード上にある〈 〉は数学記号です。漢点字用に入力する場合はきちんと区別する必要があります。

- a) 〈 〉 (2152 2153 山形かっこ)  
- b) < > 数学記号 (小なり・大なり)  

② ー (長音)、- (マイナス)、- (ハイフン)

- a) ー (213C 長音) カナ文字の長音符としてのみ  使用。キーボードから入力できます。
- b) - (215D マイナス) 数学記号としてのみ使用。  キーボードから入力できます。
- c) - (213E ハイフン) 数字や言葉をつなぐ符号。  キーボードからの直接入力はできません。多用されますので、よく覚えて下さい。

【注】ー (213D ダッシュ) は英文記号です。和文中には使用しないで下さい。(記号類の項、後日掲載、参照)

③ 漢数字のゼロ (〇)

漢数字で書かれたものも、そのまま入力します。
漢数字のゼロにご注意下さい。

- a) 〇 (213B 漢数字のゼロ) 漢数字のゼロは  これだけです。他は使えません。
- b) 0 (算用数字のゼロ) 算用数字のゼロです。  キーボードから直接入力できます。
- c) 〇 (大文字のオウ) アルファベットです。 
- d) 〇 (小文字のオウ) アルファベットです。 
- e) 〇 (217B 丸印) 伏せ字の丸印です。  キーボードから直接入力はできません。

3. 「。、？！・」、句読点類と中点

句読点類はそのまま入力します。中点は注意が必要な場合があります。

に読み替え、後ろの漢数字との間に「`」（212E アクサングラ
ーブ）を入れて下さい。（アクサングラーブの項、参照）

千二百三十四、`五 

f) 「-」（213E ハイフン）

住所や電話番号の数字をつなぐ符号です。「ー（長音）」や「-（マイナス）」は使わないで下さい。

○四五 - 二〇一 - 八六二〇 

g) 時刻の表記に用いられるコロンは、全角の「:」を使います

1 3 : 3 0 

h) 2対3の「対」に当たるコロンは、半角の「@:」を使って下さい。
（半角入力の項、後日掲載、参照）

2 : 3 → 2@:3 

i) 分数線には「/」を使って下さい。帯分数は、正数と分数の間に
「`」を入れて下さい。（アクサングラーブの項、参照）

2 / 3 

2 ` 1 / 3 

j) 西暦の略記は、全角の「'」（アポストロフィー、キーボード上段）に
続けて、下二桁の数字を入れて下さい。（数字の区切りに使う
「`」については、アクサングラーブの項参照）

' 0 1 / 1 1 / 1 

' 0 1 . ` 1 1 . ` 1 

' 0 1 ` 1 1 ` 1 

k) 「二・二六」や「五・一五」のような日付は、「・」を「.」に
読み替えて、後ろの数字との間に「`」を入れて下さい。

二・二六 → 二.`二六 

【注】 “「二二六」事件」のように、「・」がない表記の場合は
「二`二六」として下さい。 

l) 「I（2D35）、II…X（2D3E）」のローマ数字と、「①（2D21）
…⑳（2D34）」も、そのまま入力して下さい。

（レイアウトの項、後日掲載、参照）